荒雄川のほとり

——私の郷土を語る——

佐左木俊郎

青空文庫

私の郷里は（宮城県玉造郡一栗村上野目天王寺）――奥羽山脈と北上山脈との余波に追い狭められた谷間の村落である。谷間の幅は僅かに二十町ばかり。悉く水田地帯で、陸羽国境の山巒地方から山襞を辿って流れ出して来た荒雄川が、南方の丘陵に沿うて耕地を潤し去っている。

南方の丘陵は、昔、田村麻呂将軍が玉造柵を築いたところ。荒雄川の急流を隔てて北方の蝦夷に備えたのであろう。後に、伊達正宗の最初の居城、臥牛の城閣がこの丘の上に組まれ、当時の城閣を偲ばせる本丸の地形や城郭の跡が今でも残っている。

「栗駒おろし吹きなびく
臥牛城下に生をうけ
残されたりし英雄の
……」

私達は子供の時分、そんな歌を歌った。

併し、私の生まれた部落は、北方の丘陵に近く、南方の山脚を洗う荒雄の水音を、微かに聞く地点なのである。

南方の丘陵が武将の旧跡なら、北方の丘陵は宗教の丘である。即ち聖徳太子の四天王寺の一つが今の地名をなしている。豪壮な伽藍は、幾度も兵火にあいながら、私達の子供の時分まで

は再建を続けられていたのだそうだが、坊主が養蚕で火を出してから、今では仮普請の小さなものになってしまった。当時、聖徳太子が自ら刻んだという如意輪観音の像だけは、寺院の近くに、今にその堂宇を残しているのであるが、最近、それが聖徳太子の作ではなく運慶の作であることが鑑定され、近く国宝に編入されるという噂である。もう一つ、ここには守屋大臣の碑が雨ざらしにされている。十五六年前、楠木正成の筆らしいと騒がれたこともあったが、それはそのまま立ち消えになってしまった。

とにかく、私を十五の歳まで育てたこの部落は、背後に畑地の多い丘陵があり、前面に水田が開けていて、農民小説には寔に都合のいい舞台を形成している。――私が農民小説を書き出した動機の一つは、この地形にあると思う。

――昭和五年（一九三〇年）『新文藝日記』（昭和六年版）――

青空文庫情報

底本：「佐左木俊郎選集」英宝社
　1984（昭和59）年4月14日初版発行
初出：「新文藝日記　昭和六年版」
　1930（昭和5）年
※底本巻末の「年譜」を参照して、「昭和五年（一九三一年）」を、「昭和五年（一九三〇年）」にあらためました。
入力：大野晋
校正：鈴木伸吾
1999年9月24日公開
2003年10月21日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

荒雄川のほとり

——私の郷土を語る——

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　佐左木俊郎
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/